



Title	動詞に後続する限定の「ばかり」
Author(s)	小林, 可奈子
Citation	日本語・日本文化. 2003, 29, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8274
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究論文>

動詞に後接する限定の「ばかり」

小林 可奈子

1. はじめに

「ばかり」は特に「とりたて」という枠組みにおいて、活発に議論されてきた語である。同じく限定を表すとされる「ばかり」「しか」との異同やその統語的特徴などについて、さまざまなアプローチがなされてきた。どちらかといえば、名詞や数量詞に後接する用例を扱ったものが多く、動詞に後接する用例の考察は網羅的とはいえない。たとえば「寝てばかり」と「寝るばかり」の違いについて説明しうる記述は、管見の限り辞典類にとどまるようである。本稿では、前者を「テ形ばかり」、後者を「辞書形ばかり」と呼び、両者について、列挙されている用法の関連と分布について仮説を提示したい。

とりたて詞研究においては一般に「ばかり」は「自者肯定・他者否定」と記述されている¹⁾。「ばかり」の用法を観察すると、専ら「自者肯定」が目立つものから、「他者否定」に焦点のあるものまで連続的に分布している、というのが本稿の主張である。

2. 先行文献の記述

動詞に後接する「ばかり」という観点から見た場合、学習者向け辞典が文型別に詳しく記述している²⁾。ただ、それぞれの用法がどのような関連を持ち、分布しているのかという問いに答えるものではない。

先にもふれたように、「ばかり」は「自者肯定・他者否定」と記述されることが一般的である。その規定を総論として支持した上で、「自者肯定」と「他者否定」についてより踏み込んだ考察を試みたい。この両概念が、上の問いに対して掲げる試案の鍵となるからである。それに先立ち、この点に言及している先行文献を

概観しておく。

丹羽(1992)は限定を「外限定」(他の事態を排除することに重点がある場合)と、「内限定」(成立するのは当該事態で尽されるということに重点がある場合)に分ける。そうではない場合もあるとしつつ、「だけ」が外限定で「ばかり」が内限定という対立が一応成り立つ」としている。

中西(1995b)は「ばかり」の中で、予想された他者ではない複数性を持つ自者の「複機能」、自者の唯一性を強調する「単機能」というタイプを立て、段階的にそれらが連続していると論じた。

通時的考察に基づく宮地(2001)は、「だけ」が他者を問題にして自者を限定するようになり、それ以前から用いられていた「ばかり」は「自者のみに注目する」という限定のあり方に偏ってきたとまとめている。

趙(2001)は「話し手が重点をおいているのは、「だけ」「ばかり」の場合は自者に関する叙述(自者肯定)、「しか」の場合は他者に関する叙述(他者否定)であると考えられる。」と述べている(p. 215)。

とりたてて詞をめぐる概念を整理した茂木(2001)は、「だけ」と「しか」の間の「視点」の差を次のようにまとめている。

「だけ」は「自者に関して当該の命題が成立する」旨の叙述を主として行うが、「しか」は逆に、「他者に関して当該の命題が成立しない」旨の叙述を主として行う(p. 232)。

それぞれの研究によって用語や概念定義の異なりはあるが、「しか」が他者否定に重点を置いているとすることに異論はない。「だけ」については重点が自者肯定にあるとする論と他者否定にあるとする論に分かれる。本稿で対象とする「ばかり」については自者肯定に焦点があるとする論が優勢である。

これらの先行文献における見解に反し、「ばかり」に他者否定性がうかがえる可能性を示したい。「しか」「だけ」の違いを示す、具体的な根拠とされている一例を茂木(2001)から紹介する。

(1) a. 時間までに全員来ると思っていたのに、太郎しか来なかった。

b. *時間までに全員来ると思っていたのに、太郎だけが来た。

両文の許容度の違いについて、「だけ」文が自者叙述を行っているために許容さ

れないのに対し、「しか」文はこれとは異なる他者叙述を行うことにより、このような複文内の意味的な非整合性が問題にならないと説明されている。

このテストは有効だと思われるので、そのまま「ばかり」にも適用してみる。すると、下のように不自然な文となる。

(1)' * 時間までに全員来ると思っていたのに、太郎ばかりが来た。

この例文は、一見「ばかり」も自者肯定が第一義なのだという説を支持するように見える。しかし、「ばかり」にはいわゆる「複数性」に関わる制約がある³⁾。「太郎」を次のように複数の主体に代えれば、(1)'より許容度が上がるのではないだろうか。

(1) ? 時間までに全員来ると思っていたのに、一年生ばかりが来た。

さらに(2)のようになると、かなり自然な文となる。

(2) 先輩の方と話したかったのに、一年生ばかりが来た。

茂木(2001)では別の根拠からも先の主張の裏付けを行っている。

(3) 太郎だけが時間どおりに来た。

a. やっぱり律儀な奴だ。 (自者叙述)

b. * どこで油を売っているのだろうか。 (他者叙述)

(4) 太郎しか時間どおりに来なかった。

a. * やっぱり律儀な奴だ。 (自者叙述)

b. どこで油を売っているのだろうか。 (他者叙述)

(3)(4)の文連鎖の違いも、「だけ」文が自者叙述を行い、「しか」文は他者叙述を行うことの証左とされる。この例文も(1)'と同じ理由により、主体の「太郎」を、「1年生」に代えた上で「ばかり」に置き換えてみる。

(5) 1年生ばかりが時間どおりに来た。

a. 律儀な奴らだ。 (自者叙述)

b. どこで油を売っているのだろうか。 (他者叙述)

「ばかり」の第一義が自者肯定なら、aへと続く方が自然なはずであるが、bよりaの方が許容度が高いとは言い切れない。

「ばかり」の他者否定に関してもう一例紹介したい。安部(2001)では(6)に基づいて、「ダケ」では他の要素(他者)は「非該当要素として否定される」のに対

し、「ばかり」では「問題とされていない(当該要素が「ばかり」によって示されるだけ)」、という主張を導き出している(p. 204)。

(6) a 事故の原因は整備不良であるダケだ。重大な欠陥があるわけではない。

b? 事故の原因は整備不良であるばかりだ。重大な欠陥があるわけではない。

(6)の発話者の主張は「事故の原因はそれほど重大ではない」ことであり、aが非当該要素(=他の原因)を否定するのに対し、bは単に当該要素(=整備不良である)を表明するので、後続文との結びつきが読みとれず、不自然になる、と述べられている。上の「他の要素—問題とされていない」との記述は、「「ばかり」の他者否定が「ダケ」ほど積極的には認められない」という意図であるかと思われる。それでは、他者を否定する意図が読みとれる場合は常に「ばかり」は用いにくくなるのだろうか。

(7) 自己流の絵を、と思ったが、うなるばかりで描けなかった。(01/12/16)⁴⁾

(7)は一文の中に自者(=うなる)肯定も他者(=自己流の絵を描く)否定も明示されているが、自然な文である。他者の方が主文末に位置しているという構文上の条件のせいではあるが、発話の重点は「うなる」という自者よりも、「自己流の絵を描く」という他者にあるように思われる。他者否定の文脈において「ばかり」が生起しうることを示す例である。

「だけ」「ばかり」「しか」がそれぞれどう異なるかを示すのに、「自者肯定」「他者否定」の概念、およびどちらが一次的または二次的であるかが有効な軸であることは疑いない。しかしそれを属性として断定的に記述できるのは「しか」だけではないだろうか。「だけ」「ばかり」にとっては「自者肯定」「他者否定」の特徴は相対的なのではないだろうか。

本稿では動詞に後接する「ばかり」の意味特徴は「他者否定」に重点がある「ばかり」から「自者肯定」に重点があるものまで、連続的に分布しているという提案をし、4章においてその分布の実相を明らかにすることを目指す。「肯定/否定」という語は二項対立的ニュアンスが強い。連続的、段階的という面を表すため、以下「他者不在」「自者強調」という語を用いることにする。

3. 本稿で対象とする「ばかり」の範囲と形態の整理

動詞に後接する「ばかり」の形態にはいくつかのタイプがある。「P ばかりか Q」「P ばかりでなく Q」の文型では、P がテ形をとれないが、タ形はとることができる。本稿では独立して句末に用いられる「ばかり」のみを対象とし、上のような用例は考察から除外する⁵⁾。また文末に用いられても、「タ形」に後接する「ばかり」は限定を表すとは言えないので、対象外とする。「そして、飛ぶばかりが鳥の生き方ではないと思うようになった時、彼は自然に、ふわりと空に浮かんでいった。(01/11/28)」のようにガ格に立つ用例も、直接には取り扱わない。

本稿で対象とする「ばかり」の形態は以下のようにまとめられる。

- a 「V てばかりだ」
- b 「V てばかりいる」
- c 「V るばかりだ」
- d 「V ているばかりだ」

dはcの中に含まれるものと見なし、aとcの違いを明らかにすることを目標とする。「テ形ばかり」はaとbの二種類の形態をとる。構文としては、aは名詞述語文、bは動詞述語文と分けられるであろうし、実際aに比べればbの方が若干動物的な印象を与えるようである。しかし、本稿での関心はabとcの違いに向け、aとbは基本的に同義として扱う。文体によっては裸の「V てばかり」で文が結ばれている場合もあるが、これも本稿ではabと同義と見なす。

4. 分析

4.1 「テ形ばかり」の方が適格な用例

まず、「テ形ばかり」として現れた例文から見ていく。

- (8) 1年間休学し、通信制に転校したが、答えが見つからないまま遊んでばかりいた。(02/01/04)
- (9) 一歳で都会の保育園に入ったものの、なかなか慣れず、「今日はお休み？」と尋ねてばかり。(02/01/13)
- (10) 姉は「妹に最近負けてばかり。ライバルの一人です」。(01/12/27)

これらに共通するのは「遊ぶ」「尋ねる」「負ける」などの事態が繰り返されて

いる、つまり多回性を持つことである。「最近」など期間を特定する副詞句をしばしば伴い、また(8)では「問題が発生してからある時点まで」、(9)では「入園してから発話現在まで」のような期間が想定される。その期間中に当該事象が反復して起こり、それが主観的に目立っている様子を表す。

ところで、「スル」と「シテイル」の基本的な相違といえば、アスペクト面が挙げられる。その違いは「辞書形ばかり」「テ形ばかり」にも持ち込まれている。「テイル」形をめぐっては、動詞の種類とその表す意味の分類に基づいて複数の意味の類型が指摘されている。しかし、「～(して)ばかり」になるとその事象は出来事性を帯び、それが反復して起こり、主観的に目立っている様子を表す。「寝ている」というテイル形は「就寝中」という状態を表す解釈が優先されるが、「太郎は寝てばかりいる」は「途切れなく寝続ける」ことを表すわけではない。観察するたびに寝ている状態で見出されることを表す。

(8)' 1年間休学し、通信制に転校したが、答えが見つからないまま遊ぶばかりだった。

(8)の「テ形ばかり」を「辞書形ばかり」に置き換えたのが(8)'である。非文法的とはいええないようであるが、(8)と同義ではない。(8)は「主体はどんな状態にあるか」という問いに対して答える文であるが、(8)'が言おうとしていることは何であろうか。次節で検討する。

4.2 「辞書形ばかり」が用いられる用例

続いて「辞書形ばかり」が用いられる用例を見ていく。そうした用例を便宜上A～Fの記号を付して分類していくが、それらは共通の特徴をもって連続している。

4.2.1 他の事態の不在の表明

前節でもふれたように、「シテイル」と比較すると、「スル」は事態を分割せず、まるごと指し示す働きを持つ⁹⁾。テンス・アスペクト面とも特定を受けていないという点で(11)(12)にはその「まるごと性」が顕著に現れている。(A)

(11) 「鈴木さんも野球されるんですか?」「いやー、僕はもっぱら見るばかり

ですよ。」

(12) そのトレーニングをしても疲れるばかりで、筋力がつかない。

なお、(11)(12)では「野球を見る」「疲れる」事態が1回だけではなく、繰り返されることが含意される。テ形ばかりに指摘した多回性とうどう違うのかについて、述べておく。(11)「見るばかり」の話者の認識においては、主体と野球との関わり方を表す「野球をする／野球を見る／野球と縁がない」といった集合の中から一つの要素として「見る」が選ばれている。現実には「見る」事態は複数回繰り返されていて、他の要素と並ぶ一つの単体として認識されている。それに対して、「遊んでばかりいる」という形態では一定の期間(状況)内を構成するどの時点を切り取ってみても、「遊ぶ」行為の途中の局面が発見されることを表す。

次に、「ばかり」文が展開していく出来事の叙述の一部をなしている用例を見る。出来事に組み込まれているとは、Aと異なり、時間軸上の特定の箇所に位置付けられるということである。とはいえ、アスペクト的には「まるごと性」が見出せる。(B)

(13) トイレに行っても、よくなるない。おなかをさすってやっても、泣き叫ぶばかり。(02/02/24)

(14) 「言論・表現の自由を抑圧する法律だ」と批判する城山さんに、竹島副長官補らは「そんなことにはならないのでご安心ください」と言うばかり。
平行線をたどった。(01/10/26)

ここまで、アスペクト・テンス面から考察を進めてきたが、自者肯定他者否定の点ではどうであろうか。(11)～(13)の例では「野球をする」「筋力がつく」「よくなる」など、話者が想定した他の事態が文中に明示されている。(8)'もそれらと同様にとらえられる。

(8)' 1年間休学し、通信制に転校したが、答えが見つからないまま遊ぶばかりだった。

一方(14)では文中で示されていないが、たとえば「議論が噛み合って歩み寄る」といった他の事態が想定できる。言語化されていなくても、A、Bに当たる用例では他の事態を想定することが可能であり、「他者不在」感がうかがえる。

4.2.2 一方向への進行

次のような進行する事態を限定する場合を「一方向への進行」と呼ぶ。(C)「辞書形ばかり」のみが用いられる。

- (15) アフガニスタンへの空爆が始まって 1ヶ月を迎え、市民の被害は拡大するばかりだ。(01/11/08)
- (16) 生活圏に銀行の支店もない田舎で、独り暮らしの不安は募るばかりです。(02/03/16)
- (17) その色と香り、美味しさに出遭いたくてこだわりは増すばかり。(01/12/20)
- (18) 関係者の期待は予想以上で、その分、選考委員会の熱気は高まるばかり。(02/01/23)

こうした用例は安定していて使用頻度も比較的高いためか、特に学習者向けの記述では独立して取り上げられることが多い。ここで限定されているのはいずれも、程度性が認められ、その程度の高低が二次元にイメージできる事象である。二方向のうち一方向に限定されるというわけである。「一方向への進行」に当たる用法が特に存在するのではなく、「辞書形ばかり」が程度の高低が問題になる事象と共起した場合、現象的に「一方向への進行」のように認識されると捉えるべきであろう。

(16) の自者「募る」も程度性を持つ事態である。しかし、「拡大する」や「増す」に「縮小する」「減る」という反対の方向性を表す対の語が想定できるのに対し、「募る」にはそのような相手の語が特に見当たらない。その点で、Cの用例として典型的とはいえないようである。「拡大する」「増す」にとって、相手である「縮小する」「減る」が他者としてとらえられ、その不在を表明していると思われる。一方、「募る」は対の相手の語が想定しにくいという意味で、他者があまり明確ではない。その分、他者不在の度合いが低く、相対的に自者強調に傾いていると考えられる。

以下の例では、ある条件が成立したら進行すると予測される事態が「ばかり」に前接している。(D)

- (19) 官民とも旧来の制度から早期に脱却しなければ、ひずみは拡大するばかり

りである。(02/02/10)

- (20) 子どもたちは同居を強く望んでいましたが、お互いに気兼ねするばかりだし…。(01/11/15)

条件節と共起することも多い。主節が表す事態「拡大する」「気兼ねする」などは未然の事柄ではなく、既に成立している事態である。ただし、Cでは進行の「停止」が特に想起できないのに対し、Dでは「旧来の制度にとどまる(=脱却しない)」「同居する」という条件が成立しなければ、進行の停止もありうる。条件節が表す事態は未確定であり、その方向への進行が進むのは条件が成立した時点以降である。いつから進行するのかということは特定されていない。

「拡大する」は典型的に程度性を持つ事態である。それに比べれば「気兼ねする」という事態の他者不在の度合いは(16)「募る」と同様、相手の語がないため、やや低いようである。しかし、「もし同居したら」という条件節が補えるこの文脈では、「気兼ねする」ことが重なり、累積していくと解釈される。その点で、前項で述べたC「一方向への進行」との連続性が認められる。

「辞書形ばかり」が用いられる用例を概観してきたが、事象をまるごと捉えた上で限定するという特徴が共通して見られる⁷⁾。

ここまでの考察を図示したのが図1～図3である。図1、図2の矢印は話し手の認知を表すものである。

テ形ばかり

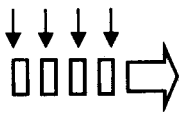


図1

辞書形ばかり

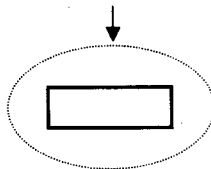


図2

辞書形ばかり・分布

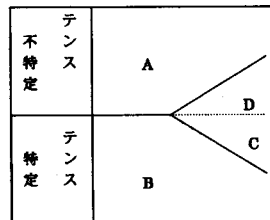


図3

4.3 自己強調の強い「ばかり」

図1、図2に示した「テ形ばかり」と「辞書形ばかり」の違いは以下の例にも

当てはまる。ただ、ここで挙げる例は感情を表していること、また、その感情を感じる主体が主に話者本人である点が特徴的である。(F)

(21) 昔からあの人には感謝してばかり。

(22) 今回、現代の若者の姿を目の当たりに見る感動を与えられ、感謝するばかり。(02/02/13)

(23) どこを訪れても感心してばかりだった。

(24) 「どうして、こんなに上手に料理できるのか」と感心するばかりです。(02/11/30)

「テ形ばかり」が用いられた(21)(23)は「感謝」「感心」の気持ちが複数の局面で繰り返し起こっていると見られる。それに対して、「辞書形ばかり」を用いた(22)(24)ではその気持ちが何回も起こったというよりは、その気持ちが塊のように全的に起こり、非常に程度が高いことに重点がある。つまり、これらの例文で話し手が表明したいのは「他の感情の不在」ではなく、当該事態(=自者)の強調であると考えられる。

4.2 で見た「ばかり」は「他者」の不在が強調されている、と述べた。「他者不在」「自者強調」の両面のうち前者が前景化され、後者は後景化されている状態である。それに対して、感情を表す用法Fは後者の「自者強調」の方が焦点化されていると思われる。

F以外に、「他者不在」より「自者強調」に重点があると思われる用法を挙げる。(25)は「完了への近づき」を表している。(E)

(25) 司法省と「和解派」9 州が、昨秋から同社と進めてきた和解手続きは 3 月に終わり、あとは判事の承認を待つばかり。(02/05/30)

この用法は「あとは」「もはや」などの副詞をしばしば伴い、「辞書形ばかり」のみが用いられるのが特徴である。他の準備事項が全て済まされ、「待つ」という事態に限られるという意味で、周辺的な「限定」の用法と見なせる。話者の関心は既に済まされた事象(=他者)よりも、「待つ」(=自者)にあると見ていいだろう。

AからFまでの用法の分布を改めて整理すると、ABでは他者不在が前景化され、EFでは自者強調が前景化される。「進行の方向を限定する」C、Dはその中間に位置付けられる。

用法Fの考察に戻る。Fの感情と見なされる語例としては、「驚く」「願う」「うらやむ」「あきれ」「悔やむ」「舌を巻く」「恐れ入る」などがある⁸⁾。具体例を挙げる。

- (26) 鈴木氏や加藤紘一氏の問題での守勢に比べ、素早く積極的な姿勢には驚くばかりである。(02/03/23)
- (27) 40代半ばでのまったく違う仕事に戸惑うばかり。(01/12/16)
- (28) がんと共存していきたいので、「なんとかこのまま静かにしてほしい」と祈るばかりです。(02/2/13)
- (29) もとはといえば、非常識な政治献金や株譲渡という私の愚かな行いに端を発したことで、浅慮を恥じるばかりです。(01/12/20)
- (30) それにしても、特殊法人改革をめぐる省庁の抵抗ぶりは目を覆うばかりだ。(01/10/31)

(27)(28)は、たとえば「戸惑う気持ちで一杯だ」「祈る気持ちが非常に強い」という心情に言い換えられると思われる。

感情を表す語類の「ばかり」は慣用的用例に近い面がある。(29)は公的な挨拶での定型表現的性格を持つ。また、「困惑するばかりだ」が用いられるのに対し、語義的に近いはずの「困るばかりだ」は許容度が低い。一方、「感謝」「感心」に類する「舌を巻くばかり」「恐れ入るばかり」などは用いることができる。こうした語彙面の不揃いさも慣用性の高さを裏付けている。

「辞書形ばかり」には「～しそうなほど」と言い換えられ、「比喩」「高い程度」などと形容される用法がある。(G)

- (31) 加えて、J2降格への恐怖から解放され、開き直った選手たちの動きは見違えるばかり。(02/01/13)
- (32) 春がきたというのに、自民党に吹き募る風は凍りつくばかりだ。(02/03/15)

この用法Gでは、その事態が実際に成立するわけではないが、その点は先にFの例として紹介した「目を覆う」「舌を巻く」などと共通している。ここにFとGとの連続性が見出せよう。Gも「辞書形ばかり」のみが持つ用法である。

「自者・他者」の観点からみた「辞書形ばかり」の分布を示すと、図4のよう

になる。

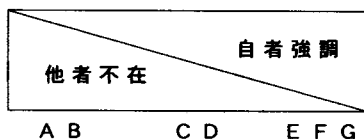


図 4

Gはもう限定という概念には収まらないと思われる。ただ、Fからの連続性を指摘する意味で付け加えた。

5. 話し手の評価

「ばかり」が話し手の否定的な評価を伴うという指摘や、評価を帯びるかどうかは文脈依存的なものだとする解釈が先行文献に見られる⁹⁾。その点について言及しておきたい。

ウェブ上の全文検索で試みたところ、テ形ばかりが用いられる場合は、元の動詞の意味に関わらず、自者に対する否定的評価が読み取れるケースがほとんどである。(33)(34)は例外的といえる。

(33) 「メイク中どんなおしゃべりを?」「冗談好きでいつも笑ってばかり。」

(34) 底抜けに陽気なダニーさんは、撮影中もスタッフを笑わせてばかり。

ここには文脈から切り離して引用したが、いずれも自者「笑う」「笑わせる」に対して発話者の肯定的評価が認められた。(33)(34)において話し手の関心は他者不在ではなく、「笑う／笑わせる」という楽しい事態である自者強調に向いていると考えられる。

また、4.2.2の「辞書形ばかり」で「一方向への進行」を表すCでは、出現頻度こそ低いが、(17)(18)のようにどちらかといえば肯定的な評価の認められる例が見られる。

(17) その色と香り、美味しさに出遭いたくてこだわりは増すばかり。(01/12/20)

(18) 関係者の期待は予想以上で、その分、選考委員会の熱気は高まるばかり。

(02/01/23)

「ばかり」にとって話し手の評価は確かに本質的な特徴ではない。では、どんな環境で否定的評価を伴ったり、伴わなかったりするのだろうか。用法Eの「待つばかり」、Fの「感謝してばかり」「感心するばかり」、Gの「見違えるばかり」なども含め、否定的な評価を伴わない場合は、いずれも自者強調へ傾いている点が共通している。したがって、否定的な評価が生じる場合、他者不在感がその原因なのではないかと考えられる。議論の材料として指摘しておく。

6. まとめ

本稿ではまず、アスペクト的観点から動詞に後接する「テ形ばかり」が、どの局面を切り取ってみても、その事態が成立している状態で発見されることを表し、「辞書形ばかり」は事態を分割せず、まるごと捉えた上で限定していることを述べた。また、従来「ばかり」は一次的に自者肯定の、二次的に他者否定の性質を持つとする見解が優勢であったのに対し、「ばかり」の他者否定・自者肯定性が一様ではないとの見方を示した。そして、「辞書形ばかり」の用法の観察を通して、「他者否定」に重点がある「ばかり」から「自者肯定」に重点があるものまで、連続的に分布している様相を提示した。

本稿で対象にしたのは、基本的に動詞に後接する「ばかり」であり、考察の中心は「自者肯定・他者否定」という観点であった。が、他の品詞に後接する「ばかり」の意味特徴や、「だけ」との異同を説明しようとする際、複合的な要因を視野に入れることが必要かもしれない。

動詞と結びついた共起という点では、「ばかり」ほど自由にテ形や辞書形の後ろに分布できるとりたて詞はないといえる¹⁰⁾。特にテ形への後接を観察することによって、とりたて詞の作用域についての従来の研究が裏付けられることも期待される¹¹⁾。動詞に後接する用法を考察する意義を改めて述べ、結びとする。

註

- 1) 沼田 (2000) の「限定 主張：自者一肯定、含み：他者一否定」など。

- 2) グループ・ジャマシ編 (1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』、大阪 YMCA 日本語教師会 (2000)『くらべてわかる日本語表現文型ノート』など。
- 3) 「ばかり」に何らかの意味で「複数性」が認められることは先行文献に指摘が多い。茂木 (2002) (pp. 173-174) もそれを前提にしている。
- 4) 取り上げる用例のうち、記載年月日の記されているものは朝日新聞紙上から収集したもので、記載のないものは主にウェブ上で検索した実例を単純化した例である。
- 5) ここでいう「句末」とは、文末および、「生返事をするばかりで、立ち上がる気配がない。」など、文末ではなくても並列文の前節末に位置するものとする。
- 6) 「まるごと／まるごと性」とは『時・否定と取り立て』(p. 5) の完成性 (まるごと性) という用語に依拠している。
- 7) 本稿で直接立ち入らないとした、ガ格に立つ「ばかり」の用法も辞書形ばかりしか用いられないわけであるが、事象をまるごと捉えた上で限定するという特徴から説明できる可能性がある。
- 8) 「驚く」「とまどう」「祈る」「あきれ」などは「テ形」をとって、4.1 で述べたような多回性を表すこともできる。一方、「目を覆う」「頭が下がる」「舌を巻く」など連語性が高い表現は「テ形ばかり」という形態はとれない。
- 9) たとえば、伊藤 (1996) は「「ばかり」における話し手の評価も「だけ」「しか」同様絶対的なものではなく、本質的機能から導きだされることがある、という程度」としている。また、安部 (2000) では「あるものの属性や性質を考えた場合、様々な属性や性質を有するのが一般的であると考えられるので、如何なる角度から判断してもある一つの属性・性質しか確認できない」とすると、それが一般常識に照らし合わせて優れた属性・性質であるとしても、偏りがあると判断され、否定的評価に結びつくのだと考えられる。」と述べられている。
- 10) 他に「テイル」形への介入を許す例としては「さえ」「も」がある。両語とも辞書形には後接しにくい、連用形に後接することもできる。「嘘をついてさえいる」と「嘘をつきさえする」の相違は、「辞書形ばかり」「テ形ばかり」同様、アスペクト面での違いに基づくと予想される。
- 11) 茂木 (2002) (pp. 185-186) では「ばかり」が動詞句のどの階層と呼応しているか、について示唆されている。

参考文献

- 安部朋世 (2000) 「バカリによる「限定」」『和光大学表現学部紀要』第1号
 安部朋世 (2001) 「「限定」の「取り立て」——ダケ・バカリ・シカ——」『日本語のとり

たて』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度別冊

伊藤智博 (1996b) 「話し手の評価と取り立てに関する一考察——「だけ、ばかり、しか」を中心に——」『さわらび』5、神戸市外国語大学

金水 敏 (2000) 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 1 時・否定と取り立て』岩波書店

定延利之 (2001b) 「探索と現代語の限定のとりたて」『日本語のとりたて』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度別冊

定延利之 (2001c) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1巻1号、日本語文法学会

趙 愛淑 (2001) 「「限定のとりたて詞」の意味的特徴」『日本語のとりたて』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度別冊

中西久美子 (1995a) 「取り立て助詞「ばかり」の限定機能——その複機能と単機能との連続性を中心に——」『日本学報』14、大阪大学

丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度ととりたて」『人文研究』44-13 大阪市立大学

沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店

宮地朝子 (2001) 「限定のとりたての歴史的変化——中世以降——」『日本語のとりたて』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度別冊

茂木俊伸 (2001) 「とりたて詞「しか」における「予想」について」『日本語のとりたて』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度別冊

茂木俊伸 (2002) 「「ばかり」文の解釈をめぐって」『日本語文法』2巻1号、日本語文法学会

〈キーワード〉とりたて、自者強調、他者不在

'*Bakari*' Connected to the Verb that Describes Limitations

Kanako KOBAYASHI

The 'Te form of *bakari*' connected to the verb expresses this finding through the formation of this condition based on an aspect viewpoint no matter which phase is removed while the 'Dictionary form of *bakari*' is taken in its complete form without splitting the condition in describing these limitations. In addition, the viewpoint whereby the affirmation of the primary said object alone and the negation of other secondary objects lack uniformity are shown in terms of the traditional '*bakari*' which affirms the viewpoint primarily of one object while negating all others. Thus the focus on affirming the said object based on '*bakari*' which focuses on 'negating other objects' exists through observing the usage of the 'Dictionary form of *bakari*' which demonstrates this aspect being distributed continuously.